

5. 医学部・歯学部・薬学部・ 医歯薬学総合研究科・保健学研究科

(1) 医歯薬学総合研究科・保健学研究科・医学部・歯学部・薬学部の研究目的と特徴	5-2
(2) 「研究の水準」の分析	5-3
分析項目Ⅰ 研究活動の状況	5-3
分析項目Ⅱ 研究成果の状況	5-10
【参考】データ分析集 指標一覧	5-12

(1) 医学部・歯学部・薬学部・医歯薬学総合研究科・保健学研究科の研究目的と特徴

本学は、総合大学院制を採るため、教員組織の実質的な重複に考慮して、総合研究科と基盤となる学部を一括りとして自己評価を実施する。

1-1 医歯薬学総合研究科の研究目的

医学、歯学、薬学分野で、国際社会において高く評価される先端的・独創的研究及び地域社会に広く活用される研究を推進し、研究成果を発信する。特に医学系は、革新的医療技術のシーズ開発、臨床医学研究を推進する。歯学系は、硬組織の再生研究、歯科疾患臨床疫学、歯科疾患と全身疾患の関係を主体とする。薬学系は、創薬等に結び付く基礎／応用研究を遂行し社会発展に寄与する。

1-2 保健学研究科の研究目的

保健医療を担うリーダーとなる中核的人材、特に「研究能力をもつコメディカル」を育成し、次代を担う保健医療研究を推進する。

2-1 医歯薬学総合研究科の特徴

1955年度設置の医学研究科及び1986年度設置の歯学研究科（ともに博士課程）を統合・部局化し、2001年度に医歯学総合研究科を設置した。さらに自然科学研究科より薬学系を移行させ、医療系大学院として2005年度に本研究科を設置した。

2014年度からは「革新的医療技術創出拠点（日本医療研究開発機構：AMED）」として中四国地区の拠点としての地域連携さらには国際連携活動を活発化し「健康寿命の延伸を目指した多様なシーズ」を効率的に実用化する一連のプロセスを完成しつつある。その後、岡山大学病院は、2017年3月に医療法上の臨床研究中核病院にも指定された。また、同年文部科学省が指定する橋渡し研究戦略的推進プログラム拠点（第3期橋渡しプログラム）にも採択されている。さらに2018年2月には、がんゲノム医療中核拠点病院に選定された。

2-2 保健学研究科の特徴

2003年度から順次、博士前期課程・後期課程を設置し、2007年度には大学院を部局化した。研究科の使命を、各医療専門職間の連携「インタープロフェッショナルワーク」を基盤としたヘルスプロモーションを実践できる人材の養成と定め、基礎的研究能力の養成に注力している。特に、保健・医療・福祉に関係した教育プログラムや機器・技術の開発等独立した研究能力をもつ教育・研究者の養成を行うことによって、現代社会が保健学分野に求めるニーズに対応できる人材の育成に努めている。

(2) 「研究の水準」の分析

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

<必須記載項目1 研究の実施体制及び支援・推進体制>

【基本的な記載事項】

- ・ 教員・研究員等の人数が確認できる資料（別添資料 6405-i1-1）
- ・ 本務教員の年齢構成が確認できる資料（別添資料 6405-i1-2）
- ・ 指標番号 11（データ分析集）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 本学が、岡山大学病院と医歯薬学総合研究科を中心に取り組んでいる拠点形成に、「革新的医療技術創出拠点」（2014年度）がある。本事業の推進にあたり、医療機関連携、大学間連携、地域連携体制を確立し、医療産業の活性化を促している。当事業では、中国・四国地方各アカデミアの有力シーズを発掘し、そのシーズを育成すべく、「橋渡し研究加速ネットワークプログラム」（2014年度採択）に引き続いて2017年度に採択された「橋渡し研究戦略的推進プログラム」に重点を置いている。現在、「健康寿命の延伸を目指した多様な重要シーズ」を所有し、それらを臨床実用化するための支援を行っている。シーズの評価・選定には、医療分野に高い専門性と実務経験を有するURAを基軸にオール岡山大学の体制を構築し臨んでいる。さらに、難病・希少疾患の克服に向けた創薬研究も加速するため、中央西日本臨床研究コンソーシアムを活用している。当コンソーシアムでは、医師主導治験の実施にあたり、臨床研究中核病院整備事業中四国診療ネットワークを活用することで保有研究シーズを、出口戦略をもって実用化へと加速する環境が構築されている。[1.1]
- 岡山大学病院では、2017年3月に医療法上の臨床研究中核病院（中国・四国地方では唯一、2019年4月1日現在、全国で12施設）に認定され、2018年2月には、がんゲノム医療中核拠点病院（中国・四国地方では唯一、2019年4月1日現在、全国で11施設）に認定された。2018年9月には、患者の遺伝子を調べて最適な治療法を選択するがんゲノム医療を提供するため、臨床遺伝子診療科を新設し、全国29の連携病院とネットワークを形成して、ゲノム医療を推進する体制を構築している。[1.1]
- 岡山大学病院バイオバンクは、診療活動によって得られる生体試料を利活用できる仕組みを整備し、医学の発展につなげることを目的として設置された。2015年4月に稼働を開始し、2016年度から臨床研究、治験に付随する生体試料の収集、保管、解析の支援を行っている。2018年度からは、院外からの試料の受け入れを開始して

岡山大学医学部・歯学部・薬学部・医歯薬学総合研究科・保健学研究科 研究活動の状況

いる。また、バイオバンク事業では、次世代シーケンサーをはじめとする種々の解析機器を整備して学内外の研究者にも解放している。このため、中四国を中心とした複数の医療機関対象とする臨床研究、治験においても試料の収集、保管のみならず、解析の支援が可能となっている。当事業の活動は、岡山大学が選定されている「橋渡し研究拠点」「臨床研究中核拠点」「がんゲノム医療中核拠点」の重要な事業を支援することにつながっている。 [1.1]

- 中性子医療研究センターは、がんを中心に希少疾患治療の分野において、医学、薬学、理工学の最先端技術を融合した研究教育体制の確立を目指し、2017年4月に新設された。国内外の放射線がん治療の研究を行っている拠点（放射線治療の世界基準を定めている国際原子力機関や新世代の加速器型中性子発生装置を開発している名古屋大学など）から第一線級の研究者を招聘し、革新的で全世界に導出可能ながん治療法の確立を目指した取り組みを進める体制が整備できつつある。 [1.1]

<必須記載項目2 研究活動に関する施策／研究活動の質の向上>

【基本的な記載事項】

- ・ 構成員への法令遵守や研究者倫理等に関する施策の状況が確認できる資料
(別添資料 6405-i2-1~33)
- ・ 研究活動を検証する組織、検証の方法が確認できる資料
(別添資料 6405-i2-34~37)
- ・ 博士の学位授与数（課程博士のみ）（入力データ集）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 医療系部局では、研究に携わるすべての者が必須である研究倫理eラーニングコースの教材を2017年4月に日本学術振興会に変更するとともに、未受講者リストを作成することで、全員受講に努めている。 [2.1]
- 2014年度から継続して行われている「革新的医療技術創出拠点」事業の推進にあたり、岡山大学病院内に設置されている新医療研究開発センターを中心に国際水準の質の高い臨床研究・治験を実施する体制を構築している（別添資料 6405-i2-38）。 [2.1]
- 臨床研究法下に行う臨床研究について、「特定臨床研究コンシェルジュ」及び「特定臨床研究 Review Board」を2018年度に設置し、臨床研究を円滑に実施できるよう支援体制を整備した。また、臨床研究法に携わる医師・歯科医師のための特定臨床研究PI（研究責任医師）認定制度を開始し、法の下に行う臨床研究の品質確保に努めた（別添資料 6405-i2-39）。 [2.1]

岡山大学医学部・歯学部・薬学部・医歯薬学総合研究科・保健学研究科 研究活動の状況

- 医療系部局では、適切に研究が遂行されるように全学で制定された研究に関する規則に加えて、臨床研究及び臨床倫理を審査する各種委員会を設置している。これら委員会については2019年度に見直しを行い、再編成した(別添資料 6405-i2-40)。
[2.1]
- 医療系部局では、医療系等研究開発戦略委員会を置き、研究開発戦略やプロジェクト研究の組織化を検討している。この委員会を母体に毎年、医歯薬学総合研究科主催のブレインストーミングを実施している。参加者の範囲は年々拡大し、医療系部局に加えて、自然科学系や文科系部局の研究者に及ぶ学際的イベントとなっている(別添資料 6405-i2-41)。
[2.1] [2.2] [2.0]
- 薬学系では、研究活動の質の向上に向けて、有機合成系、生化学系、衛生系、物理化学系、臨床薬学系の各領域において国内外で先端的に活躍する研究者5名による特別講演会を毎年実施している。これには全教員が参加し、様々な議論を行い、最先端の動向や知見を取り入れることで、研究活動に役立てている(別添資料 6405-i2-42)。
[2.1] [2.2] [2.0]

<必須記載項目3 論文・著書・特許・学会発表など>

【基本的な記載事項】

- ・ 研究活動状況に関する資料(保健系)
(別添資料 6405-i3-1)
- ・ 指標番号 41~42(データ分析集)

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 医歯薬学総合研究科では、研究業績総数は1,979編/年(第2期:2,031編/年)、原著論文総数は1,255編/年(第2期:1,081編/年)、欧文原著論文数は1,001編/年(第2期:834編/年)と高い水準を維持している。専任教員1人あたり研究業績総数は4.3件/年(第2期:4.4件/年)、欧文原著論文数は2.2編/年(第2期:1.8件/年)と高い水準を維持している(別添資料 6405-i3-2)。
- 保健学研究科の研究業績総数は163編/年(第2期:169編/年)、原著論文数は82編/年(第2期:84編/年)、欧文原著論文数は57編/年(第2期:48編/年)と高い水準を維持している。専任教員1人あたり原著論文総数は1.6件/年(第2期:1.4件/年)、欧文原著論文数は1.1編/年(第2期:0.8件/年)と高い水準を維持している(別添資料 6405-i3-3)。
- 特許等の知的財産形成にも精力的に取り組んでいる(別添資料 6405-i3-4)。

<必須記載項目 4 研究資金>

【基本的な記載事項】

- ・ 指標番号 25～40、43～46（データ分析集）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 競争的資金は、年平均 20.5 億円（第2期：21 億円）で第2期調査時と同水準を維持し、競争的資金に寄付金を加えた外部資金の総額は年平均 35.7 億円（第2期：34 億円）であり、第2期調査時から増加を示している。（別添資料 6405-i4-1～3）
- 寄付講座は第2期の 16 講座から 20 講座へ増加している。さらに寄付研究部門、共同研究講座、共同研究部門もそれぞれ 1 件設置されており、進展がみられる。（別添資料 6405-i4-4）

<選択記載項目 A 地域連携による研究活動>

【基本的な記載事項】

（特になし）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 将来の岡山県の地域医療を担う人材育成に関する研究を行うとともに、その研究成果の普及を行い、県民の健康・福祉の向上に寄与することを目的とした 20 の寄付講座（第2期 16 講座）を設置し、地域との密接な連携により活動を行っている（別添資料 6405-i4-4）。 [A.1] [A.0]
- 2012 年度から地元企業協賛の医工連携で CT ガイド下アブレーション（CT を撮影しながら、がんを針を刺して焼いたり凍結させたりすることで、がんを死滅させる患者の身体にやさしい治療）を自動で行えるロボットの開発に着手してきた。その開発ロボット (Zerobot) について 2018 年に初めての臨床試験を実施し、成功を納め、その有用性への大きな手応えを得ている。今後、大規模な治験に移行することで、Zerobot の製品化を目指している。 [A.1]
- 超高齢化社会における予防医学・介護となる健康増進の推進を目的に、「創造的健康増進プランによる三朝地区をモデルとした地域再開発」をテーマに、高齢化の著しい三朝地区における活力の低下を持続的に解決すると共に他の範となる地域再開発に資する研究活動を行っている。研究成果として第3期には、成果報告会（毎年 4 回）を開催したほか、経済産業省の委託を受け、教育講演会を 4 回実施した。現地ではラドン熱気浴施設が 2 箇所新設されるなど、再開発の効果が得られている。 [A.0]

岡山大学医学部・歯学部・薬学部・医歯薬学総合研究科・保健学研究科 研究活動の状況

- 岡山県不妊専門相談センター「不妊・不育ところの相談室」を岡山県受託事業として 2004 年度より運営している。第 3 期には、AMED の支援を受けて、心理の専門家ではないスタッフのためのサポート・ケア実践用 DVD を 2 種類作成し、公開配信している。岡山県不妊専門相談センターの職員に加えて、2013 年に医学部（保健学科）一農学部連携（医農連携）により開設された岡山大学生殖補助医療技術教育研究センターの教員である生殖医療担当医や胚培養士、2013 年に保健学研究科が事務局となり設立された「がんと生殖医療ネットワーク OKAYAMA」の生殖医療担当医、胚培養士、がん治療担当医、助産師、看護師、心理士などがメンバーとなり、2018 年 10 月、不妊症・不育症・がん患者の妊孕性温存などの診療・教育・研究に対応する岡山大学病院リプロダクションセンターを開設した。「妊娠中からの母子支援」即戦力育成プログラムを開講、リカレント教育による実践人育成を行っており、2018 年度から、文部科学省 職業実践力育成プログラム（BP: Brush up Program for professional）に認定されている。 [A. 0]

<選択記載項目 B 国際的な連携による研究活動>

【基本的な記載事項】

（特になし）

【第 3 期中期目標期間に係る特記事項】

- 医歯薬学総合研究科が主導して、分子イメージングを基盤技術とする産学官連携モデルと新事業の創出拠点、おかやまメディカルイノベーションセンター (OMIC) を運営している。第 3 期では分子イメージング国際研究拠点形成プロジェクトを立ち上げ、陽電子断層撮影法 (PET) イメージングとセラノスティクスの先端研究をドイツのユリウス・マクシミリアン大学と共同で開始した。当国際共同研究は、2018 年度に岡山大学で創設された「大学改革促進のための研究拠点形成 (RECTOR) プログラム」の下、進められている。 [B. 1] [B. 2]
- 薬学系が主導して、「岡山大学インド感染症共同研究センター (インド拠点)」を運営し、「感染症研究国際展開戦略プログラム (2015～2019 年度) (AMED)」を実施している。研究者 2 名と事務職員 1 名がインド拠点に常駐し、下痢感染症の予防、診断、創薬を目指した国際共同研究を遂行している。研究成果として、有力な経口赤痢ワクチンの候補を作製した (2016 年度)。汎用性の高い、廉価な赤痢ワクチンの開発と製品化が期待されている。 [B. 1] [B. 2]
- 歯学系を中心に、第 3 期において、永年実施して来た臨床研究デザインワークショップの英語版を作成し、本邦の臨床研究プラットフォームをアジア諸国の国際標

岡山大学医学部・歯学部・薬学部・医歯薬学総合研究科・保健学研究科 研究活動の状況

準として通用させるべく活動している（国際臨床研究デザインワークショップ）。本ワークショップは、2017 年度にはベトナムハイフォン医科薬科大学の Haiphong International Dental Center [HIDC]において、2018 年度にはハノイ医科大学の Odonto-stomatology Research Center for Applied Science and Technology [ORCAST]において実施した。両施設は、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科（歯学系）と両大学歯学研究機関により共同設置、運用されている。さらに2020年2月には、ミャンマーのヤンゴン医科大学で実施した。本ワークショップは3年間に亘り、岡山大学「国際社会人共同博士号取得拠点形成事業」発展支援経費を得て開催している。なお、薬学系においては、ハイフォン医科薬科大学との間で同大学の若手教員の育成等について意見交換を行い、共同研究実施に向けた取り組みを進めた。

[B.1] [B.2] [B.0]

- 薬学系では、韓国・成均館大学との間に博士ダブル・ディグリープログラムを2014年に開設し、2017年に大学院生を受け入れ、共同研究を発展させた。また、有機化学系教員2名を招聘し、講義およびセミナーを実施した。 [B.1] [B.2]
- 薬学系を中心として、ミャンマー国保健省食品医薬品局 (MFDA) と2016年度に大学間協定を締結し、2017年4月からMFDA職員2名を大学院研究生として、同年より大学院博士後期課程に入学し、両国間での連携による研究活動に励んでいる。

[B.1] [B.2]

<選択記載項目C 研究成果の発信／研究資料等の共同利用>

【基本的な記載事項】

(特になし)

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 研究広報では、先端研究成果をホームページ (<https://www.okayama-u.ac.jp/>) に掲載すると共にプレスリリース配信を行っている。また、岡山大学の強みある医療系分野とその融合分野などの更なる増強と本学研究者が同分野で発表したイノベティブな研究成果を世界にタイムリーに発信するため、英語版 Web マガジン「Okayama University e-Bulletin」を年4回発行し、その姉妹誌 Web レター「Okayama University Medical Research Updates (OU-MRU)」を定期的に発行している。さらに、広報誌いちょう並木や岡山大学 MONTHLY DIGEST を通して研究の進展状況について随時発信している。地域社会に関しては、主として市民公開講座、岡大サイエンスカフェ、岡山医療フォーラム、健康フェスタ（山陽新聞社との共催）等を通して情報発信を行っている。これらは、地域の方々に学術研究成果を分かり

岡山大学医学部・歯学部・薬学部・医歯薬学総合研究科・保健学研究科
研究活動の状況

やすく説明するとともに、医歯薬学への興味と関心を促し、地域社会との連携を深める目的で定期的に開催している（別添資料 6405-iC-1）。 [C.1] [C.0]

<選択記載項目D 学術コミュニティへの貢献>

【基本的な記載事項】

（特になし）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 学会の主催活動：種々の学会の理事長を務めるとともに、積極的に学術集会等を開催している。第3期中に開催された主要なものを列記する。第56回日本生物物理学会年会（2018年）、第28回日本医療薬学会年会（2018年）（以上薬学系）、日本補綴歯科学会第127回学術大会（2018年）、第47回日本歯科麻酔学会総会・学術集会（2019年）、第62回日本口腔外科学会総会・学術大会（2017年）（以上歯学系）、第71回日本酸化ストレス学会・日本N0学会合同学術集会（2018年）（薬学系）、日本原子力学会2018年秋の大会（2018年）（保健学系）（別添資料 6405-iD-1～2）。 [D.1]
- 学術雑誌の編集委員長・副委員長等：第3期間中にこれまで務めた編集委員長は延べ16名、副委員長等は延べ9名である（別添資料 6405-iD-3）。 [D.0]
- 診断基準等の策定委員会委員長、取り纏めの長：第3期間中にこれまで務めた診断基準等の策定委員会委員長、取り纏めの長等は延べ10名である（別添資料 6405-iD-4）。 [D.0]

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

＜必須記載項目 1 研究業績＞

【基本的な記載事項】

- ・ 研究業績説明書

(当該学部・研究科等の目的に沿った研究業績の選定の判断基準)

医歯薬学総合研究科では、医学、歯学、薬学の各分野で、先端的・独創的な基礎・臨床研究、医薬品シーズ探索・開発研究、医療機器開発研究、地域社会に貢献可能な研究を推進する目的を有した融合型総合大学院方式という特色がある。国内外の医学・歯学・薬学・生命科学分野の学界の期待、医療・歯科医療全般や医薬品を享受する国民や社会の期待、そして製薬業界をはじめ国内外の産業界の期待に応えるべき研究を推進する点が最も重要である。基礎医学研究成果とともに、研究成果の社会実装を意識し、本研究科が中心となって遂行し、かつ、高インパクトファクターや社会的影響を有したものを選定した。保健学研究科は、看護、放射技術科学、検査技術科学の3分野からなり、3分野共通の判断基準の策定は困難であるが、当研究科の研究目的(インタープロフェッショナルワークを基盤とするヘルスプロモーション)と整合性を持つことを重視して研究業績を選定した。

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 医学系においては、基礎医学生物学から各病態解明学分野、医療機器の開発と実用化分野で卓越した研究成果が上がっている。特に基礎と臨床との連携による橋渡し研究が充実してきており、これまでの研究の応用への発展を遂げた多くの成果が得られている。学術面では、世界に先立って光受容オプシントタンパク質の新機能の解明 (Nat Commun)、がんと神経のクロストークの重要性の発見 (Nat Neurosci)、筋ジストロフィー症の原因解明 (Nat Commun) に大きな成果を得た。応用面では、テロメライシン抗がん遺伝子治療製剤の実用化 (Mol Ther Oncolytics)、がん転移に有効な生物製剤の開発と実用化 (Int J Cancer)、メトホルミンによるT細胞機能の改善・増強を介したがん治療の実用化 (EBioMedicine)、診断が極めて困難であった下肢リンパ浮腫の病態評価に有効な新しいリンパ系画像評価法の開発 (Radiology)、リンパ腫の新たな病型の確立 (Lancet Haematol)、敗血症に有効な生物製剤の開発と実用化 (EBioMedicine)、敗血症の予測診断法の開発 (Crit Care Med)、新しい心電図指標を用いた遺伝性不整脈における心臓突然死リスク予測法の開発と実用化 (JAMA Cardiol、Circulation)、小児心不全に対する心臓内幹細胞

岡山大学医学部・歯学部・薬学部・医歯薬学総合研究科・保健学研究科 研究成果の状況

移植療法の臨床適用研究 (Circ Res)、尿中糖鎖プロファイリングによる腎臓病の診断技術の開発 (Diabetes Care、Nat Commun)、コラーゲン型 HRG など新開発機能性医用材料による高機能医療機器の創出 (Sci Rep)、CT 透視ガイド下針穿刺ロボットの開発と実用化 (Radiology) など、世界をリードする重要な成果をあげている (別添資料 6405-ii1-1)。 [1.0]

- 歯学系では、第 1 期から行ってきた軟骨組織から発見した CCN ファミリータンパク質 2 (CCN2) の研究を発展させ、骨格の成長・分化・維持・再生機構に関する新知見を積み重ね、歯学系の実績を中心に成書にまとめられる (Methods Mol Biol) など高い質を維持している。メカニカルストレスの研究では硬組織に対するメラトニンの作用を解明し (J Pineal Res)、また骨代謝における核内の p130Cas の役割を明らかにした (Sci Adv)。細菌叢に関する研究では、腸管上皮細胞による腸内細菌由来抗原の取込みが、粘膜免疫における T 細胞機能恒常性の維持に重要であることを解明するなど (Science)、卓越した研究成果が上がっている (別添資料 6405-iii1-1) (再掲)。 [1.0]
- 薬学系では、これまでに医薬品合成のための有機化学反応論や有用な新規化合物の合成に関わる研究、生理機能や病態の解明などに関する研究を展開することで、多くの画期的な成果をあげてきた。その中でも、レチナールタンパク質を対象にした生命機能の光制御と操作 (J Am Chem Soc、PNAS)、味覚受容体の立体構造解析を介した味物質認識機構の解明 (Nat Commun)、アミノベンゾピラノキサテン (ABPX) 色素開発とその発光メカニズムの証明 (J Am Chem Soc)、新規トランスポーターの輸送機能と新規阻害剤の同定 (PNAS、Nature) など、トップジャーナルへの掲載に繋がった (別添資料 6405-ii1-1) (再掲)。 [1.0]
- 保健学系の生殖医療に関する研究では、第 3 期において、パートナーのいない健康な未婚者、LGBT 当事者などの卵子・精子の凍結保存など、社会情勢の変化に対応した生殖医療実態調査を行い、全国的にも報道され注目された。低線量放射線の研究は、多くの表彰・受賞を受け、日本原子力研究開発機構などの外部資金も獲得している。また、第 3 期には SDGs の一環として放射線を活用した地域再開発を推進したことにより自治体からも注目されている。キャスルマン病に関する研究では、国際診断基準の策定に加わるなど、診断の質向上に貢献した (Blood)。国際診断基準の原著論文は数多く引用された (Am J Hematol)。また、末梢性 T 細胞リンパ腫、非特異型 (PTCL-NOS) に関する研究では、網羅的遺伝子解析により新たな分類を提唱する (Leukemia 2 報、Modern Pathol) など、多くの業績をあげている (別添資料 6405-iii1-1) (再掲)。 [1.0]

【参考】データ分析集 指標一覧

区分	指標番号	データ・指標	指標の計算式
5. 競争的外部 資金データ	25	本務教員あたりの科研費申請件数 (新規)	申請件数(新規)／本務教員数
	26	本務教員あたりの科研費採択内定件数	内定件数(新規)／本務教員数 内定件数(新規・継続)／本務教員数
	27	科研費採択内定率(新規)	内定件数(新規)／申請件数(新規)
	28	本務教員あたりの科研費内定金額	内定金額／本務教員数 内定金額(間接経費含む)／本務教員数
	29	本務教員あたりの競争的資金採択件数	競争的資金採択件数／本務教員数
	30	本務教員あたりの競争的資金受入金額	競争的資金受入金額／本務教員数
6. その他外部 資金・特許 データ	31	本務教員あたりの共同研究受入件数	共同研究受入件数／本務教員数
	32	本務教員あたりの共同研究受入件数 (国内・外国企業からのみ)	共同研究受入件数(国内・外国企業からのみ)／ 本務教員数
	33	本務教員あたりの共同研究受入金額	共同研究受入金額／本務教員数
	34	本務教員あたりの共同研究受入金額 (国内・外国企業からのみ)	共同研究受入金額(国内・外国企業からのみ)／ 本務教員数
	35	本務教員あたりの受託研究受入件数	受託研究受入件数／本務教員数
	36	本務教員あたりの受託研究受入件数 (国内・外国企業からのみ)	受託研究受入件数(国内・外国企業からのみ)／ 本務教員数
	37	本務教員あたりの受託研究受入金額	受託研究受入金額／本務教員数
	38	本務教員あたりの受託研究受入金額 (国内・外国企業からのみ)	受託研究受入金額(国内・外国企業からのみ)／ 本務教員数
	39	本務教員あたりの寄附金受入件数	寄附金受入件数／本務教員数
	40	本務教員あたりの寄附金受入金額	寄附金受入金額／本務教員数
	41	本務教員あたりの特許出願数	特許出願数／本務教員数
	42	本務教員あたりの特許取得数	特許取得数／本務教員数
	43	本務教員あたりのライセンス契約数	ライセンス契約数／本務教員数
	44	本務教員あたりのライセンス収入額	ライセンス収入額／本務教員数
45	本務教員あたりの外部研究資金の金額	(科研費の内定金額(間接経費含む)＋共同研 究受入金額＋受託研究受入金額＋寄附金受入 金額)の合計／本務教員数	
46	本務教員あたりの民間研究資金の金額	(共同研究受入金額(国内・外国企業からのみ) ＋受託研究受入金額(国内・外国企業からのみ) ＋寄附金受入金額)の合計／本務教員数	